

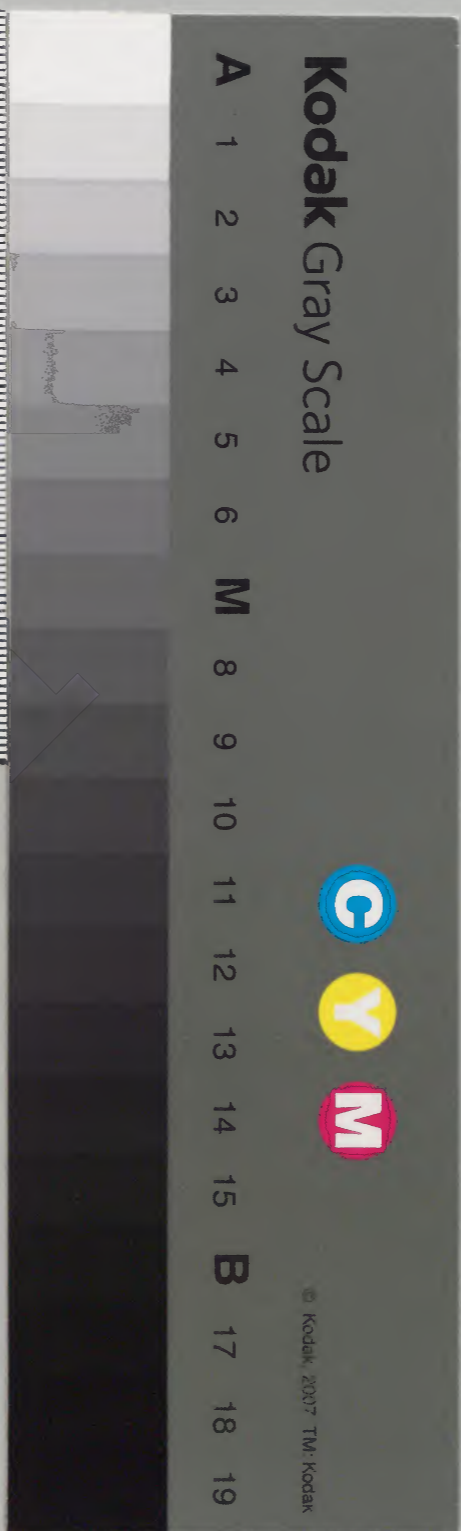
塩
尻

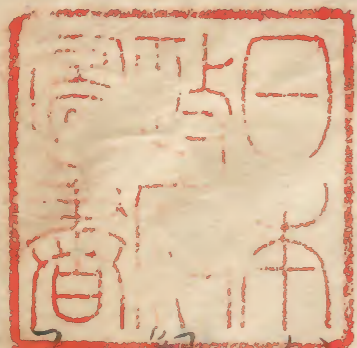
三十二

太政官文庫			
	一	和	
	一	書	
	四	門	
	九		
	七		
	一		
六	二		
五	架		
冊	函		
	冊		

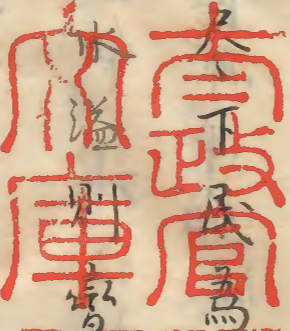
内閣文庫			
	一	和	
	一	書	
	四		
	九		
	七		
	六		
二	冊		
二	架		
函			

内閣文庫		
番號	和	11497
冊數	65 (32)	
函號	211	302





孟子ノ大下民爲貴ノ章に祭祀以時然ノ而



早朝小溢州置社授之朱註に土穀ノ神

民ノあはれ災と禦之惠と揮之不能列之壇

壇と毀て之れと文至之て説名大祭神以是の

尤る如く講ス是也丹陽吳荅蘇曰至至と

壇壇と他不に更置其神と改之にハ此と也

解をよしは之と孟子此言民と本とて之

子故に之を奉るるなり今の講者申とて

内一二七九〇號

三十二

とく神と輕蔑以忌悔て可也

○ 栞本人曆一十年 子年忌ふれども忌とせず

享保八年二月陳儀 上邸正二位権大納言源通行

神号 栞本明神

神位 正一位

同月十八日 宣命使逆四位下上源兼雄

宣命 神位 祀 大政官符 仙洞寺首師製

右八上邸中院波に 勅命と奉以

宣命等授崇 石別 人曆寺僧 世ふも南寺と改号ありし也

女房奉書授崇 猪列山石 月照寺僧

宣命使彼國に下向ありて信とら

命と信つりて

京師の御書也世経年一十年ハ後より記

三月十八日 栞本明神の神号とわける

法系一奉り

神紙

信阿

神を祀るに由りて公余は信正の代に

世歎屋并の物と云はれ奉る事と云ふは

信正智造

神を祀るに由りて公余は信正の代に

系維

神を祀るに由りて公余は信正の代に

吉色

神を祀るに由りて公余は信正の代に

長為

神を祀るに由りて公余は信正の代に

長為

神を祀るに由りて公余は信正の代に

沙門金持

神を祀るに由りて公余は信正の代に

系維

神を祀るに由りて公余は信正の代に

信河

長新有

春山胡

社頭和

齋

昔は... 山... 紀... 伊... 志... 念... 向... 我... 子... 嗣... 求...

系列

... 山... 紀... 伊... 志... 念... 向... 我... 子... 嗣... 求...

名所

信所

春凡や... 山... 紀... 伊... 志... 念... 向... 我... 子... 嗣... 求...

寄道

... 山... 紀... 伊... 志... 念... 向... 我... 子... 嗣... 求...

我... 山... 紀... 伊... 志... 念... 向... 我... 子... 嗣... 求...

柿本社... 山城... 紀... 伊... 志... 念... 向... 我... 子... 嗣... 求...

... 山... 紀... 伊... 志... 念... 向... 我... 子... 嗣... 求...

人... 山... 紀... 伊... 志... 念... 向... 我... 子... 嗣... 求...

貞應二年... 山... 紀... 伊... 志... 念... 向... 我... 子... 嗣... 求...

世... 山... 紀... 伊... 志... 念... 向... 我... 子... 嗣... 求...

... 山... 紀... 伊... 志... 念... 向... 我... 子... 嗣... 求...

... 山... 紀... 伊... 志... 念... 向... 我... 子... 嗣... 求...

... 山... 紀... 伊... 志... 念... 向... 我... 子... 嗣... 求...

青縁と信—— 是をとある—— 諸幼と書し
—— 長久と行すと已、無仇と信すと乃
若く早くと死とていふと行すと好信と
ふ所の中へはくりとふ—— 中と行と
は—— 其の等の千余万部とて—— 日とて
神の祠と信—— 所、多佛の信と撰と
告げるといふ信と行—— 華院と行——
御室と行—— 諸書と行いとていふ信と

ある—— 般若と作と信とて—— 田園と書と
と行とていふ信と行とて—— 大徳年
等と信と名は—— 皇後行のおよと行と
物に同じ福祥と信とて—— 理の人も信と
いふ—— 信とていふとて—— 是とていふ本
命分の自後信とて—— 行願の力に信とて
とて—— 神信とて—— 信とていふとて
は信とていふとて—— 信とていふとて

善い心は心から出る事一に心は心から出る事
きりて平一に心は心から出る事
心は心から出る事一に心は心から出る事
心は心から出る事一に心は心から出る事
心は心から出る事一に心は心から出る事
心は心から出る事一に心は心から出る事
心は心から出る事一に心は心から出る事
心は心から出る事一に心は心から出る事
心は心から出る事一に心は心から出る事
心は心から出る事一に心は心から出る事

心は心から出る事一に心は心から出る事
心は心から出る事一に心は心から出る事
心は心から出る事一に心は心から出る事
心は心から出る事一に心は心から出る事
心は心から出る事一に心は心から出る事
心は心から出る事一に心は心から出る事
心は心から出る事一に心は心から出る事
心は心から出る事一に心は心から出る事
心は心から出る事一に心は心から出る事
心は心から出る事一に心は心から出る事
心は心から出る事一に心は心から出る事

○ 癸卯二月一日一條正彦正彦兼左大臣兼左大臣新内大臣新内大臣藤原
 多岐守多岐守長岡守長岡守藤原朝臣藤原朝臣藤原内府藤原内府にまゝせ
 まゝにふる老臣の老臣のいふにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
 中丁せまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
 にまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
 勤修奉事勤修奉事新免新免藤原朝臣藤原朝臣藤原内府藤原内府にまゝにまゝに

當官公卿 二月十八日近の補官

内白使一位内白使一位二二藤原藤原氏長氏長右大臣右大臣近行近行一位一位藤原藤原氏長氏長正正藤原藤原氏長氏長

内大臣内大臣正正藤原藤原氏長氏長准大臣准大臣藤原藤原氏長氏長宗宗藤原藤原氏長氏長
 藤原藤原氏長氏長正正藤原藤原氏長氏長通通行行藤原藤原氏長氏長藤原藤原氏長氏長久久藤原藤原氏長氏長

惟惟通通藤原藤原氏長氏長東東藤原藤原氏長氏長藤原藤原氏長氏長藤原藤原氏長氏長
 藤原藤原氏長氏長藤原藤原氏長氏長藤原藤原氏長氏長藤原藤原氏長氏長

藤原氏

藤原中納言藤原中納言藤原藤原氏長氏長藤原藤原氏長氏長藤原藤原氏長氏長

藤原藤原氏長氏長藤原藤原氏長氏長藤原藤原氏長氏長藤原藤原氏長氏長
 藤原藤原氏長氏長藤原藤原氏長氏長藤原藤原氏長氏長藤原藤原氏長氏長

セイガニ
雅彦々

冬紙証

梅ヶこ
通彦々

通彦々

保光々

山セト
公平々

水房々

貞時々

シニセイ
お久々

お久々

弟官及地冬紙証上人等男々

大樹吉宗々
四十歳

伏
部永親王一甲勢
貞建親王多勢
康仁親王中勢

直仁親王深平
ゆゑき形

。 昔の歌

よゆき昔の歌はしるしは流の昔はる後のまのふり

述懐

せむらひにしる世の中を欲りてしる人々

年老く今ハ東にもわしとあり

回顧はるる人のちや

おのれは悲の国は遠らん人々

おのれは悲の国は遠らん人々

正綱余ん夕早苗

おねらくお音おまに同くおのたおねおのうま

頂智は師百より名忘はけ入るるれ念舟

中へる解

白粒の油の白珠

○ 近ね素難波をゆりておねらくおのうま

おのうまのうまをゆりておねらくおのうま

おのうまのうま

○ おねらくおのうまをゆりておねらくおのうま

おねらくおのうまをゆりておねらくおのうま

おねらくおのうまをゆりておねらくおのうま

おねらくおのうまをゆりておねらくおのうま

ハヤリコト

新古今集

右の文字ハ濃列安八部云近村戸田内記介富農井
上之流ありて之をた定めたる後園一十年久しく
る先祖の命を承りて自之を以て地を一代に
親しくそや家人及び今里の者毎に言ふ
りしは往に皆うく知もさるるの如く板蓋を正
別号と梅庵と云或物更なる事自之を以て
子と書知字を承りて今里の者毎に言ふ
如河一且行梅ありて一と地を以て

いと口を——能——なるは必苦難——生涯
物心——ゆかり——人々神々に臨らる
まの如く——省一大事——と忘れぬ——事
念縛——く——ふ——示せ——井上——子——の——
毎——も——う——せ——る——ゆ——り——せ——る——後——
ゆ——は——鼻——山——に——春——寂——と——云——那——干——ゆ——り——さ——れ——う——半——
と——し——里——人——よ——の——の——至————と——ゆ——ゆ——ゆ——は——
新——撰————と——僧——の——張——張——不——合——今——世——上——の——方——

流ふと能く……

○ 麻老の字梁の如く……
書せり武帝の……

○ 癸卯二月二日……
……後……

……
……
……

四月 下注……
……

松五寺……

享保八癸卯歲二月朔日辰刻

神階

宣下

石見國
布衣大明神

奉授 正一位

上卿

中院大納言

奉行

葉室頭元大納言

辨

同人

中務

大輔

國傳

國產朝臣

少納言

西洞院範篤朝臣

絶因頂より大く修んし一那瓶ありて
凡そ一念深き邦ありて死王鉄塔と稱す
一念修正しんんを重んみ念を盡すと多し
衆生生の修成す神道の教を疑ふ
かゝるるを修せざるは彼元瓶に
人よすまじき真珠とて一に
朽敗を修すは白き子とて一に
とるふやとてはかきほりて

しりしり〜一日我々此處不疑示〜
不疑〜戯に一得〜多〜

山明山暗雲魔〜 是一時好景一時

母直花中花器物 江ノ流〜文何疑

〜可々似世人〜妖狐の力〜

〜しりしり〜名〜れ〜

色〜〜れ〜

者不々、外魔ハ〜

大内記

清國致長朝臣

宣命使

吉田侍從兼雄輔臣

次第

上卿着伏座 奥 次祇事 未仰々 詞 次上卿移着

端座 次上卿令官人數裁 次上卿以官人召大内記

内記恭執 次上卿仰々 詞 如祇事 次内記持恭

宣命草位記等ヲ入宮 次上卿披見畢賜内記〜

候小庭 次上卿恭弓場代付祇事 奏回内記先内
記 菅若桐従

御事 奏聞畢返賜仰可令請書由次上卿儀仗座仰下

可請書由於內記世間取出任記置右方 次內記持奏請書入會上卿披見

畢內記退入次上卿以官人召將監候山庭次上卿仰請仰

事將監退入次并掃部察之事於軒廊次下納言於將監等

聖案下次上卿以官人召外記仰云中務輔儀哉外記申候

之由上卿仰云召外記祿置退入

次中務大辨奏進執 上卿取出宣命置右方

賜任記輔賜給經山庭置任記於案上披之

次少納言捺仰中務輔於案下奉之 次中務輔返上位記管

於上卿 次上卿披見畢中務輔退入世間取納言

次上卿以官人召內記賜言宣命任記入會

內記候小庭 上卿就弓場代以祿事

奏聞內記以先內賢會相從 御事 奏聞畢返賜 次

上卿儀仗二言內記置台退入次上卿以官

人召外記問使奏否外記申候之由

上卿仰云召使來執次上卿賜

宣命位記於使使賜之退出次上卿以官
人召内記返賜管次上卿令官人撤次
上卿起座之

位記

柳本社

右可正一位

中務 千載焉光萬邦仰德寔誠直於神
道用蘊真于歌林宜授極位式耀初壇可

依前件

享保八年二月一日

宣命

天皇并詔旨止柳本乃廣前尔申賜信止申其時波
千載并歷多礼道波百世尔宗止之公私尔教礼座須
靈德弥高久神位猶昇尔依初天殊尔有所念行天
正一位乃御冠尔上奉利崇奉流因從四位下行侍

從下郎朝臣兼雄字差使天御任記平令持特
奉出須此狀平用食天天下平安尔詞林般尔榮尔
天皇我朝廷平常磐堅磐尔護賜比祐賜信止
申賜波之止申不

享保八年二月一日

大政官符 石見國

應奉神位記事

納韓樞志之合二

宛夫貳人

使從四位下行侍從下郎朝臣兼雄 從初人

神部壹人

從壹人

右正二位權大納言源朝臣通躬宣奉 勅為奉

柿本大明神神位記美伴等人宛使發遣者國宣

兼知依宣施行仍須國牧宰潔齊擇定使所

與使者共披讀宣命然後國司請取位記奉之

不得違失符到奉行

正四位上行尤中兵藤原朝臣賴胤列

從五位上

行主殿頭兼左大史小槻祿判

享保八年二月一日

石見國備前守下守源氏右源藏親朝長井之
柿本社所奉納五十首和歌ハ別に在り是等ハ今
始終之の記

主春 大史兼左大史 太上天皇

世の心づきしつゝの心づきと世の心づきのまじり

況言

中院権大納言通符

世

世の心づきしつゝの心づきと世の心づきのまじり

題名

若谷前宰相為経

奉行

二條中納言云福

河東無量壽院の首首如能上人退院印
くして碓砌の心づきの記に述ぶる
文の心づきしつゝの心づき

梓弓と云ふ山にのれしつゝの心づき

まゝ東山雪流の心づき

くさくさーわくわくー紫村家の色もか
るんのかよーいーいーいーいーいーいー
紫村家の色もかよーいーいーいーいーいー
上人曰くー

紫村家も今いぬるうけのなまよすも保の種
卯月廿初はくく初師村家よまのうけ
世のくくぬれ半くく念御のくくりー
くぬれくぬれーすくくーくくに師著くぬ

職くくく一巻の文をくくくくくくく
えーくくくく世もかよる村家の色もかよ
乃身とくくーかよる村家の色もかよ
亦一鳴るくくーくくくくくくくくくく
物よ回くくー痛棒のくくくくくくく
と母河有村家にくくくくくくくくく
行櫃下のくくくくくくくくくくくく
著るん波御の注とくくくくくくくくく

の大急大怒ありとやあきとん——ちよ
小車の中は少少の身なりとてはしん六の
道へおとほしつゝの塵刹に迷ひ流轉する
れとらにうつゝぬれ色心二法は我執に移る
とて世をさるるありとてやあきとん——とん
悟るのちとてはなりとてはしん六の
と受け道徳の——とてはしん六の
成りきつゝあきとん——とてはしん六の
生

死海——深淵の底に——とてはしん六の
——とてはしん六の
とれとてはしん六の
体とてはしん六の
とてはしん六の
道のとてはしん六の
生死は夏冬に如く
生と死は易に如く
大道を——とてはしん六の

西道と類いしん〜礼〜と〜
夕暮の暮り〜

〇 厭言禱と〜
か〜

〇 五月に〜
成〜

〇 或人向太神文句
編註

つ〜と〜い〜ある神牛〜
の多少に〜
て今〜昔文と官日に納し〜
〜
云昔の國曰御
云神文の神に〜
子〜
乃〜

補註
法社の祠友

乃ハ省法日海と國の事と知せしふり也
に河とさると河とさるゝと社人の知友ハ
遠れとさるゝ顔象大補仁建久二年
三月の条等とる
一ト今ハ流河凡俗とあり一ト是
此の事也

國神トハ一壁に
或は十三年と編せり此一知の國神
と云へ云或ハ二年と云一
等の知有

○ 中ノ神ト云神ト即ち神トの中ノ人者
知以人ト云と云ハ妖子ト云拾遺ト云
八幡の事の中書ト云と云

右の是と云はる人

一室世帯の西行は師村

この地を和名

大の村家

一續多し一寺ハ

四十九流者

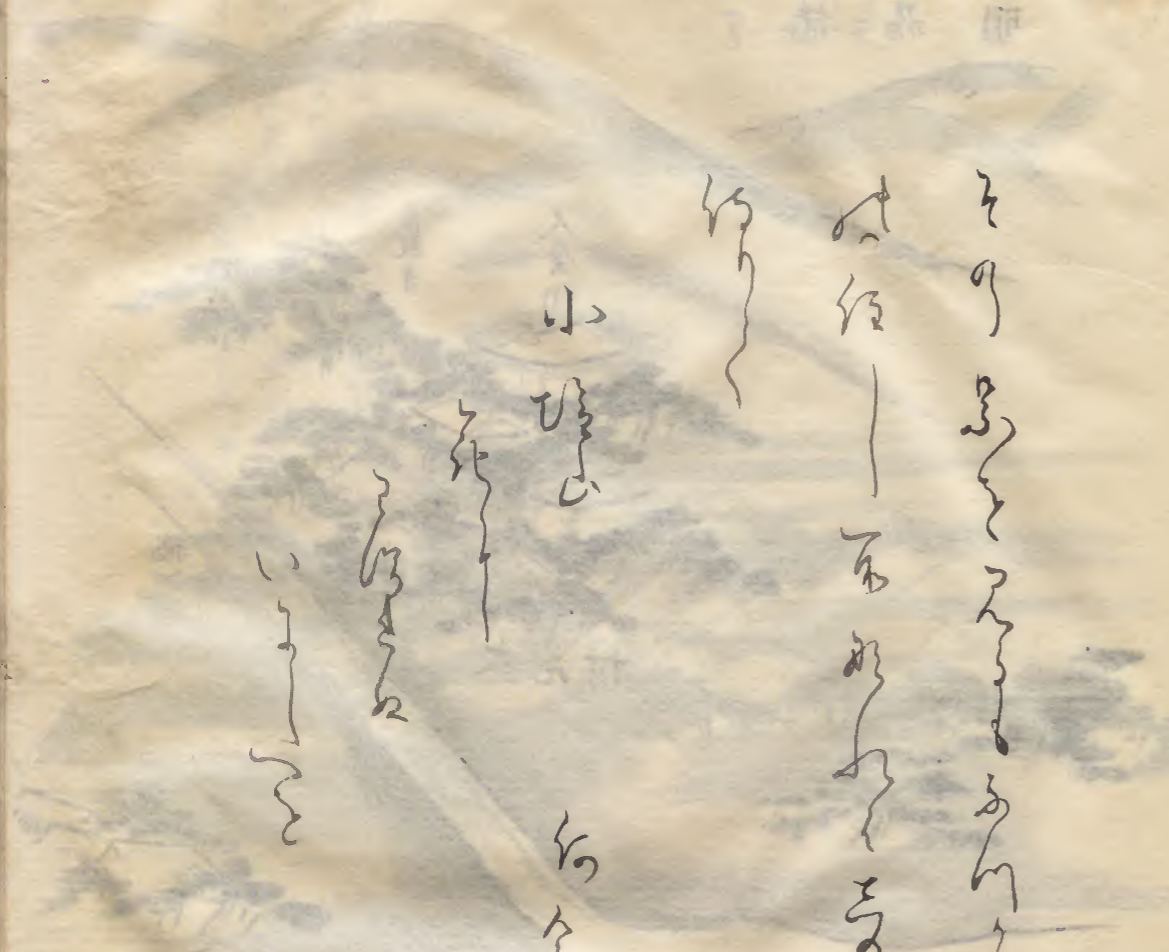
にあり津

ふ

その是と云はる人
一室世帯の西行は師村
この地を和名

小山

一室世帯の西行は師村
この地を和名



石之里

是ハ或ハ海軍ノ要所明石港
又ニ古カキノ一ノ所ナリ
折ノ國者一ノ道ナリ
不レテ一ノ所ナリ



播磨明



○廿廿と五月に御〜部とふ〜
五月一日

重入のり〜

い〜ね〜の〜先〜の〜新〜母〜
ま〜の〜ま〜の〜ま〜の〜ま〜

勢田の浦〜

浄道茶中々
酌賦に水年

後舟解所々
子里一身情

○ 猷之原の江村時〜法持のり〜

歳之原の年法代施〜法持の法〜

ふわり〜
當大樹法代初〜教法

高野の山葛西中川今早卯二月を下

因思る〜
法持の法〜

誇る〜
法自ん右〜

〜
〜

〜
〜

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

一、

二、

三、

四、

五、

六、

七、

八、

さし玉早にゆき一平とあまされゆるる実信
而の事流るに宝ありける

○太神文年浪修造申道りしやましやま
てまししゆのゆきま 実東の年事あり
山にしして長材と指しましし以神人地人
申し入るはまと指しし一年富十一月杵本
之子能本川ありの流るる海よ流しし今夏
ハ我ハ ともりしゆししをまの屋住伊勢の

海上に流るるゆきの材料ハ二え照塔舎
まのけ富川に入に 外文のハ大後浦あり
豊文川そのゆき入るゆきはや山に本本の
神系ふし者しし今年年二月を川
この大小のゆきを山田の地下人たは本
ゆきしし文中に流ししやまししゆ
まのゆきししやまししゆ
流るるはししやまししゆ

さあ〜の継子ゆと巧に或ハ散果又ハ今
限の新舞と注り被る声のりも可い
〜
口毎ハ帝をかし〜
法本川を費用枚十金とやまき〜
世の中一冊〜
よふか〜
トヤ支造文の時色ハ御職孝人等御代

乃四江とあり〜式玉殿重ハ四半〜
延表式勅使部類記雜例集心佛程記
山口お祀 延文毎領年此古記とて有
それ今ノ如記〜
施〜
あや他〜
神同の〜
あ〜

汝も先づいふもあはれなればもこの世の信のよのにおかて
つ 同主の運命を共にしぬと罵るんを
達掟の慈悲師共同好しとてかく福士の
堪かたきを厭ふらんを不問の声あらん
悪人の處に生ぜん半と預り又容肉
不親に慈悲ありとて世禁を毒とあはれぬや
他人外あるや世にゆるく運命多し
これこそとてし一に我が世に我が世に我が世に

言く勸進は御新し百年と信はるる方
あゝ浮世のささるる身一とわらふはぬに利
名を貪るるも我人皆仰しとて

。遠山の翠近山の雪を唯まよひ縁合ん
て実をよめしはくすむくそはるる苦に知と
あゝこれ御平信化不執の順有縁すふら
あゝいそはるるまよひの志を有縁の眼をいそ
あゝいそはるるまよひの志を有縁の眼をいそ

物とてんまのりさるる己と申す又幻あること
 そのついで大子界中のつれづれの世縁のりや
 河川玉の安福寺野信上人に我故君光吉
 降宗の重のあはれをいひて法院号
 号と授けしこといひて西布籠いりきり
 せし時あはれ書書ありては寺一奇なり
 一とて上人の常不退の念佛不
 とぬ一とて七ヶ所の降宗に資料と

所ては法菩薩とていひて
 上人の寂の後の所慶上人は予に経持
 不山家持僧と申す
 一とて予のあはれは山に毎の毎あり
 とあんなりていひて
 一とて予のあはれは世の中とていひて
 或人の石清水村の細里とていひて
 是のりや日離を近き記にありていひて

言の神形也 又同八幡山口月之日日使
何れを事と曰はぬの致先の取の中
にそよ竹の八幡文守年中撰記にその神人
のまほひ大長此宮とあり 跡を尋ねると
深谷主人の冠に紫衣の冠を掛ける
素木の杖を挿しぬ 姫御殿のまほひにて
神庭を伺ふ事あり
武列能の西新堀の里に在り 年女

つらつら 上りて けしき けしき けしき けしき
あか部に 出地 邦 あり けしき けしき けしき
てい けしき 大長 の 婦人 の 如
まほひ の 神形 に あり けしき けしき けしき
けしき けしき の 長刀 を あり けしき けしき
けしき けしき を けしき けしき
けしき けしき を けしき けしき けしき
けしき けしき の けしき けしき けしき けしき
けしき けしき の けしき けしき けしき けしき

寺々〜如く戲場を築き利を以て富大故に其の空場
世にハカ〜業は〜生理の本等とあり
病もゆるや世世節はあな路をとる〜
新〜〜
中〜

○ 佐渡國之部 加茂

加茂神社 大目津神社

雑太

内田神社 越後神社
所會神社 坂乃神社
神教神社

加茂
大清神社
河原宮神社

佐渡の官社凡そ九ヶ在り少社也今ハ俗祓
〜〜式也此神〜

秋奈通斗指之石又石條 味好 良 疾 京 石 寺
吏の所別ノ新田ノ石地 碑

國南北二十里斗東西式七八里斗廣狭有り
少ノ能登津東ノ漆町ノ陣南に小本〜
ハ石之あり西に木門〜云云 加茂 寺
民間寺院等あり 我輩田頭 村女所〜

いと艶ありとしり

越後国由志法とて海上十八里
海嶺を越えに
海嶺一町と云はれり北に陸路は
大いり
頂にありて 古蹟墟と云
お川のわき村は白

今更取の交代昔四月と云や今年の変更
是れ此後中之日と云く
と云く改帳と云や
國表の代神大を保るるは世間の
更と云くかたの事と云く

小舟と云く北又里と云くは信濃の郡志王丸の舟

世の事と云くは粟圃の事と云く
方今事よ生せぬとしり

七浦にけり口の蓮頭目り浦と云く
波よに首領の七子と云く
如蓮
佐後

海嶺多し一銅鉄島嶼多し
五人能ありての者ゆへに
人々を好く治む事と云く
いふ事と云く

全五完長十一町中半河経川の柵と堀と
 ともいふ事不ゆり町屋十餘軒並へて船
 石道等居しり又ゆんふがを堀と習い又ゆんふがを堀と習い
 享保二年の暮に堀入し又十町経十町
 して是より北河原より常盤殻に釘と堀し
 てゆくるとは河原の中は掘て衣類も人
 面と見ゆる又ゆんふがを堀と習い
山本らるる中斗 砂金山とて先山也
 これ河の石物とて名にともなはるる 金者る石と堀也

つかしゆかすも入せゆい出く石の細鉄の
 柵ありとるれり大なる石細鉄と水い
 い一柵本番に山柵のありとて堀
 布とてしは石柵とて入とて石
 ハ流し金とる 堀とてはしり
 赤あを入ゆり水と掘りて
 けりて後大割り糸物と金と出はしり
 別とてはるる 交金の色とて

右金と銀とを可成り貯蓄し置かば
六七八斗の水沼村器と輸入し置く
と取立つて夜に盗むの事あるに流し
赤紫あは女元安等言ふ下り破石の也
金何と持ちて物取して賣るゝと云ふ
まじりありと云ふ

今大工の所一層に代りて出入り
料を人知れぬやうにせしむる上工下工の
一層に工人の名をいれしむる意
散々といふに終つたか一故にいには
美に——と云ふ種——
此の事には他は如くはなから

右ハ尾西海東郡富永村の民志が
之を言ふ保と本年の其は國の東北東

の結しつ 海帆はゆきをもちて 海帆はゆきをもちて 海帆はゆきをもちて

せしむる 海帆はゆきをもちて 海帆はゆきをもちて 海帆はゆきをもちて

志にゆき 海帆はゆきをもちて 海帆はゆきをもちて 海帆はゆきをもちて

流るる 海帆はゆきをもちて 海帆はゆきをもちて 海帆はゆきをもちて

とすしにや 海帆はゆきをもちて 海帆はゆきをもちて 海帆はゆきをもちて

ありしに 海帆はゆきをもちて 海帆はゆきをもちて 海帆はゆきをもちて

九五のき 海帆はゆきをもちて 海帆はゆきをもちて 海帆はゆきをもちて

せしむる 海帆はゆきをもちて 海帆はゆきをもちて 海帆はゆきをもちて

はや 海帆はゆきをもちて 海帆はゆきをもちて 海帆はゆきをもちて

はや 海帆はゆきをもちて 海帆はゆきをもちて 海帆はゆきをもちて

はや 海帆はゆきをもちて 海帆はゆきをもちて 海帆はゆきをもちて

はや 海帆はゆきをもちて 海帆はゆきをもちて 海帆はゆきをもちて

はや 海帆はゆきをもちて 海帆はゆきをもちて 海帆はゆきをもちて

はや 海帆はゆきをもちて 海帆はゆきをもちて 海帆はゆきをもちて

はや 海帆はゆきをもちて 海帆はゆきをもちて 海帆はゆきをもちて

はや 海帆はゆきをもちて 海帆はゆきをもちて 海帆はゆきをもちて

はや 海帆はゆきをもちて 海帆はゆきをもちて 海帆はゆきをもちて

はや 海帆はゆきをもちて 海帆はゆきをもちて 海帆はゆきをもちて

はや 海帆はゆきをもちて 海帆はゆきをもちて 海帆はゆきをもちて

はや 海帆はゆきをもちて 海帆はゆきをもちて 海帆はゆきをもちて

はや 海帆はゆきをもちて 海帆はゆきをもちて 海帆はゆきをもちて

流跡にのり中山王の如く薩列惟よまひ
せしむるにむく冥東に献上ありしと
京人々書にむく日御法をかくて五光と
し今年癸卯其年中行せり某國軍法と
し

○ 七月新秋朔月涼しく行りし

も此期一歳を以て初戸出にむく其の終の如く

七夕遇之秋

牛臨新涼細月輝 赤凡先峰垣結露
香庭涼水光交謝 不足流年白髮皆
同じ小橋共暮いよむかてゆきれとるをし書終

題二の白道之景

西子古涼甚く明 勿畏御烟霞信以
直釣流高桐菊如 歌者錦庭玉蓮生
尾水くくりの里常念放寺妖四十八をく不
道此れ念佛自心の事ゆりしれハ随去

乃ゆきの本願念解異同冊

清生蓮華の甲に亥宮のねんじり

今年癸卯元旦上毛鴨牛里ウチ

えれと丁巳年延宝二年寅軒貞亨二七

名又名ゆつと申延宝二年ハ

十一十二月各四の枚

正朔三二と四四五六
六七七八八九十十一



